

草 木 町 遺 跡

2003年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

草 木 町 遺 跡

2003年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しております。また、平安京遷都以来今日に至るまで都市として永々と生活が営まれてきており、各時代の生活跡が連綿と重なり合っています。都であるゆえに、そこから発見されるその一つ一つは、日本の歴史を語るうえで欠くことのできないものとなっています。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした遺跡の発掘調査を通して京都の歴史の解明に取り組んでおります。その成果を市民の皆様幅広く公開し活用いただけるよう進めていくことが研究所の責務と考えております。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、出土遺物の小・中学校や公的施設での貸出展示、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところであります。

さて、当研究所では従来各年度毎で報告してまいりました「京都市埋蔵文化財調査概要」を改め、平成13年度調査分より各調査箇所毎に1冊の報告書として発刊しております。その第13冊目として、このたび京都市立常磐野小学校体育館・プール新築工事に伴います草木町遺跡の発掘調査の成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援をたまわりました関係者各位に厚くお礼ならびに感謝を申し上げます次第です。

平成15年2月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 草木町遺跡
- 2 調査所在地 京都市右京区太秦京ノ道町20 - 5
- 3 委託者及び承諾者 京都市 代表者 京都市長 梶本頼兼
- 4 調査期間 試掘調査：2001年7月27日～2001年8月22日
1次調査：2001年9月4日～2001年10月5日
2次調査：2002年2月5日～2002年3月20日
- 5 調査面積 試掘調査：約237m² 1次調査：157m² 2次調査：160m²
- 6 調査担当職員 津々池惣一
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「鳴滝」を参考にし、作成した。
- 8 使用方位・座標値 使用測地系 日本測地系（改正前） 平面直角座標系 （ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度（座標および標高は、京都市遺跡測量基準点を使用した）
- 10 遺構番号 調査区ごとに通し番号を付し、遺構種類を前に付けた。
- 11 遺物番号 挿図の順に通し番号を付した。
- 12 掲載写真 村井伸也・幸明綾子・調査担当職員
- 13 作成担当職員 津々池惣一・能芝妙子
（調査地点図）



目 次

1 . 調査に至る経緯	1
2 . 立地と環境	2
3 . 試掘調査	4
(1) 経 過	4
(2) 遺 構	4
(3) 遺 物	7
(4) 小 結	7
4 . 1次調査	8
(1) 経 過	8
(2) 遺 構	8
(3) 遺 物	11
(4) 小 結	12
5 . 2次調査	13
(1) 経 過	13
(2) 遺 構	13
(3) 遺 物	16
(4) 小 結	17
6 . ま と め	18

図 版 目 次

図版 1 遺構	1 試掘 1 トレンチ全景 (北から)
	2 試掘 1 トレンチ拡張区 (南から)
図版 2 遺構	1 試掘 2 トレンチ全景 (西から)
	2 試掘 2 トレンチ全景 (東から)
図版 3 遺構	1 1次調査全景 (南東から)
	2 1次調査溝139西端部 (北から)
図版 4 遺構	1 1次調査土壌117 (南から)
	2 1次調査土壌115 (南から)
図版 5 遺構	1 2次調査全景 (東から)
	2 2次調査土壌86 (北から)

- 図版 6 遺構 1 2次調査土壌97(北から)
 2 2次調査土壌13(東から)

挿 図 目 次

図 1	調査位置図 (1 : 25,000)	1
図 2	調査区配置図 (1 : 2,500)	2
図 3	試掘調査前全景 (南東から)	4
図 4	土壌15 (東から)	4
図 5	試掘 1 トレンチ実測図 (1 : 100)	5
図 6	試掘 2 トレンチ実測図 (1 : 100)	6
図 7	1次調査前全景 (東から)	8
図 8	1次調査第 1 面実測図 (1 : 100)	9
図 9	1次調査第 2 面平面図 (1 : 100)	10
図 10	1次調査出土遺物実測図 (1 : 4)	11
図 11	2次調査前全景 (北東から)	13
図 12	土壌 6 (北から)	13
図 13	2次調査第 1 面実測図 (1 : 100)	14
図 14	2次調査第 2 面平面図 (1 : 100)	15
図 15	2次調査出土遺物実測図 (1 : 4)	16
図 16	軒平瓦拓影・実測図 (1 : 2)	17
図 17	土壌35出土硯拓影 (1 : 4)	17

表 目 次

表 1	試掘調査遺構概要表	7
表 2	試掘調査遺物概要表	7
表 3	1次調査遺構概要表	11
表 4	1次調査遺物概要表	12
表 5	2次調査遺構概要表	16
表 6	2次調査遺物概要表	17

草木町遺跡

1. 調査に至る経緯

調査地は、京都市右京区太秦京ノ道町の京都市立常磐野小学校の敷地にあたる。この一帯は過去の立会調査などによって、平安時代前期の溝や土壌が遺物とともに検出されている¹⁾。よって『京都市遺跡地図台帳』平成8年版に遺跡番号768として登録され、「草木町遺跡²⁾」と命名されている。このたび、常磐野小学校体育館・プール新築工事に伴い、まず試掘調査を実施し、遺構の残存状況等を確認した後、発掘調査を実施した。

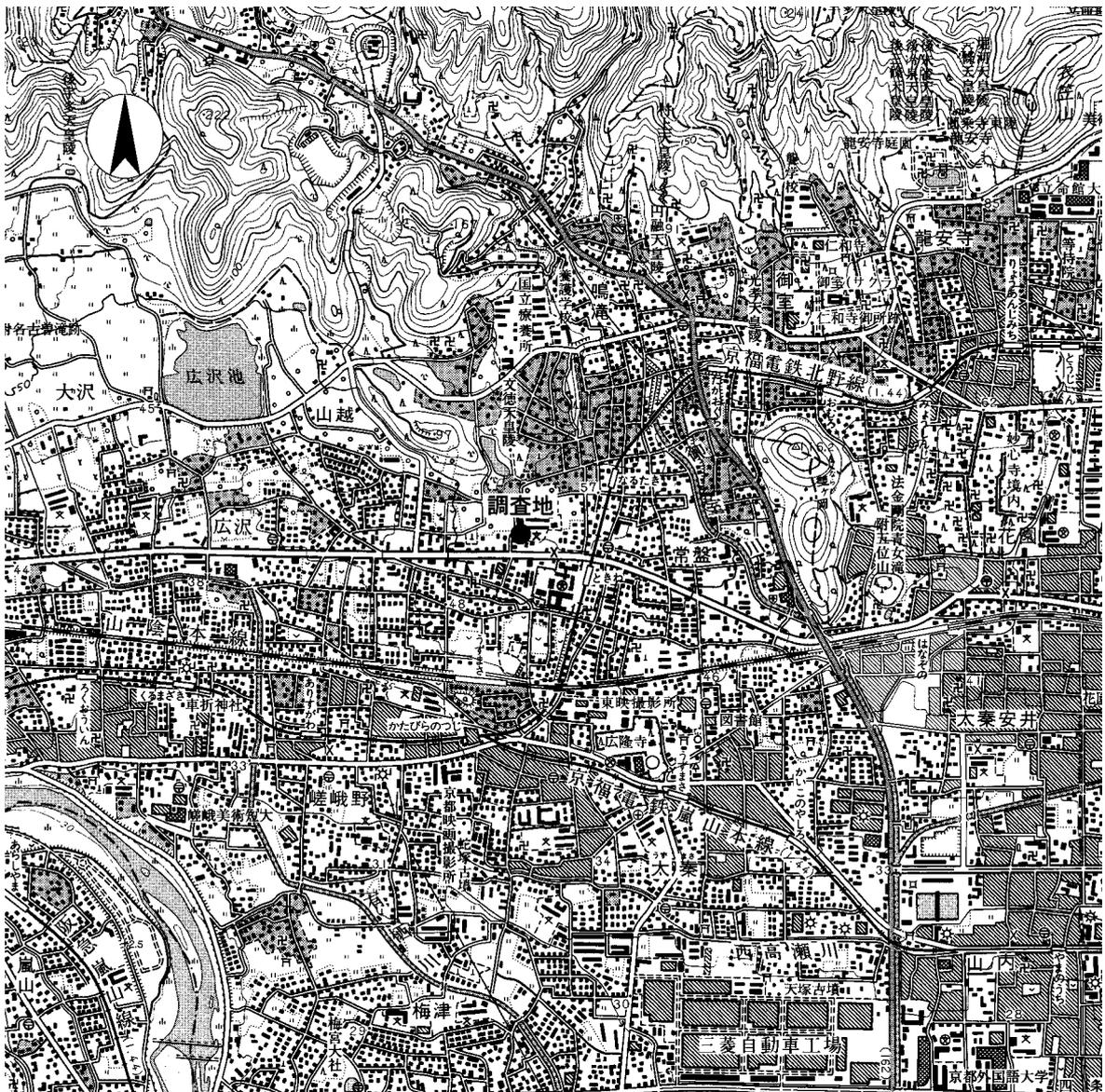


図1 調査位置図(1:25,000)

2. 立地と環境

調査地は、平安京北域の西約1kmに位置する。この地域北方に展開する山地は、中・古生代に堆積した泥岩・砂岩・チャートから構成される丹波山地の末端部である。その一つ音戸山は、南東に舌状に延びる丘陵を形成している。調査地は、その南方に緩やかに南に傾斜している平坦地である。すなわち嵯峨野方向から南東方向に流れる有栖川と、鳴滝方向から南東方向へ流れる御室川に挟まれた、双ヶ岡地域の西部にあっている。双ヶ岡地域の旧地形は、旧御室川と旧西ノ川に挟まれた中央の段丘、旧西ノ川の東に広がる緩扇状地、御室川から西の扇状地の3つの地形により形成されている。中央部は、北の御室大内の山地から幾つかの丘陵が舌状に南に張り出し、その細長い丘陵の間に谷状の地形が形成されている。旧流路は谷状の地形に沿って南流し、双ヶ岡の東、西の裾部から双ヶ岡先端の南で旧御室川に合流する。東部は、北から南に緩やかに傾斜し、中央部とは対照的に平坦である。その平坦地に、竜安寺内の鏡容池から浅い谷地形に沿って旧流路が南流していたことがわかる。西部は、南西に向け緩やかに下る丘陵状の地形を呈しているが、その丘陵が形成される以前の一時期、御室川の旧流路が南西方向に流れていたことが嵯峨野一帯の立会調査で示されている。当調査地は旧流路の西に近接している。

一帯の山麓や池畔は、先土器時代の遺跡が散在する。縄文時代では早期・前期の遺物が上ノ段遺跡、中期の遺物が嵯峨院下層広沢池遺跡などから採取されている。古墳時代前期になると和泉式部町遺跡、村ノ内遺跡などから竪穴住居跡や土師器などが検出されている。中期には和泉式部町遺跡や西ノ京遺跡などがある。かわって、中期以降に属する仲野親王陵古墳や太秦馬塚古墳な

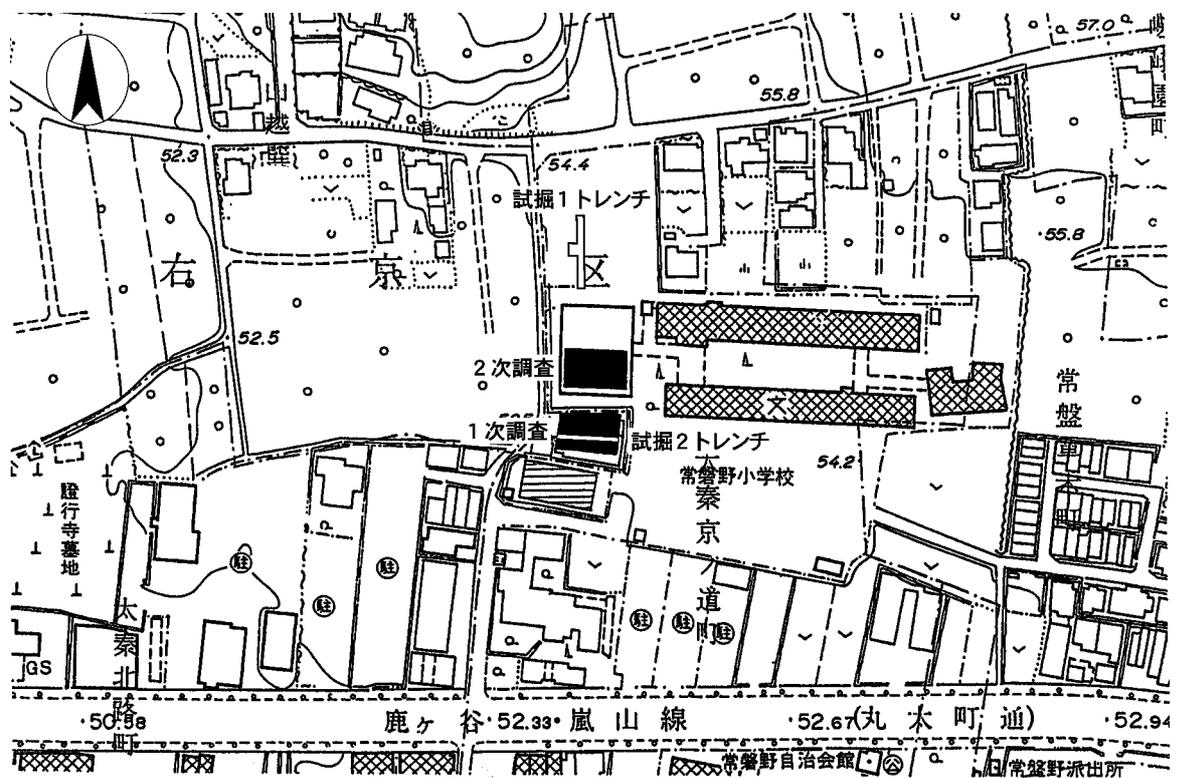


図2 調査区配置図(1:2,500)

どの前方後円墳が確認されるようになる。6世紀後半代になると異古墳や常盤東ノ町古墳群などが造成された。後期には、山麓部に山越古墳群、御堂ヶ池古墳群、音戸山古墳群、双ヶ岡一ノ丘古墳や双ヶ岡古墳群などの群集墳が登場する。集落も常盤仲之町遺跡、西野町遺跡などがある。

平安時代になると別業の造営が多くなる。常盤の源常の山荘や双ヶ岡東麓の清原夏野の山荘、源融の棲霞観などが挙げられる。そして宇多天皇による御室仁和寺や四円寺なども造られる。

関連する遺構では、鳴滝藤木町、鳴滝安井殿町付近で嵯峨野立会調査で平安時代前期から中期の土壌・溝・遺物包含層などを検出しているが、遺構の時期が仁和寺建立以前のものであり、院家とは関連しないことから、遺跡名を遺構の多くが分布する当地の現町名から鳴滝安井殿町遺跡と呼称している。遺跡の性格については、当地の地名である「安井殿」が、比定のきっかけになるが、承和14年(847)常盤に存在したとされる平安時代前期の左大臣源常の山荘に関する³⁾可能性もある。

さらに、後期には70を越す仁和寺の子院が林立する。調査地の北西にあったとされる子院・蓮華心院は、承安4年(1174)八条院暲子内親王により常盤の辺りに建立され、建暦元年(1211)八条院崩御の後、院内に墓塔が造られた。廃絶時期については不明である。現状でその範囲は鳴滝中道町の北半部にあたり、寺域内のほぼ中央の北寄りに内親王の墳墓が現在も残っている。

鎌倉時代以降では、広隆寺・大覚寺など法灯を続ける寺院がある内で、嵯峨野方面を中心に浄土宗系の化野念仏寺などが信仰を集め、奥嵯峨は墓域となった。また、武家政権による影響下で妙心寺などの禅宗寺院が盛行する。

しかし、室町時代後期の応仁の乱などで双ヶ岡、嵯峨野の全域が戦乱に巻き込まれ、その機能を喪失した。江戸時代にいたって復興の槌音が始まったという。

3 . 試掘調査

(1) 経 過

調査地は、体育館北側グラウンドと同南側休閒地との2ヶ所に、それぞれ1トレンチ、2トレンチを設定した。1トレンチはグラウンド中央より西側に南北方向に幅1.22m、長さ25.0mを設定した。2トレンチは休閒地の中央部分に幅1.2m、長さ24mを設定した。調査は7月27日から8月22日にかけて実施した。京都市埋蔵文化財調査センターの指導により、1トレンチは顕著な遺構がみられず、土壌検出の周辺を部分拡張を行った。2トレンチは平安時代の可能性のある井戸状土壇や柱穴など23基の遺構を検出したため、発掘調査を行うこととなった。

すでに述べたように、調査地は源常による山荘なる別業が近在することが想定され、また周辺の立会調査でも平安時代の土壇や溝を検出しているので、特に平安時代の遺構の検出を主たる目標として調査を行った。

(2) 遺 構

1トレンチ

調査地はグラウンド造成時に埋め立てた盛土が1.5m前後あり、遺構面はそれ以下にあった。遺構はその下の地山を掘った形で検出した。

土壇15 1トレンチ中央付近で検出された土壇で、南北2.0m、東西1.5mほどの楕円形に近いものである。深さは1.2mで、底には人頭大の石が雑然と検出された。井戸の可能性もあるが断定はしがたい。

溝41・42 土壇15に近接して検出した。二つの溝は隣接しており、南北に1.8m以上流れている。溝41は幅0.3mで、深さは1.2mを測る。溝42は幅0.4mで、深さ0.2mである。両者は重複関係にあり、溝42が新しい。

2トレンチ

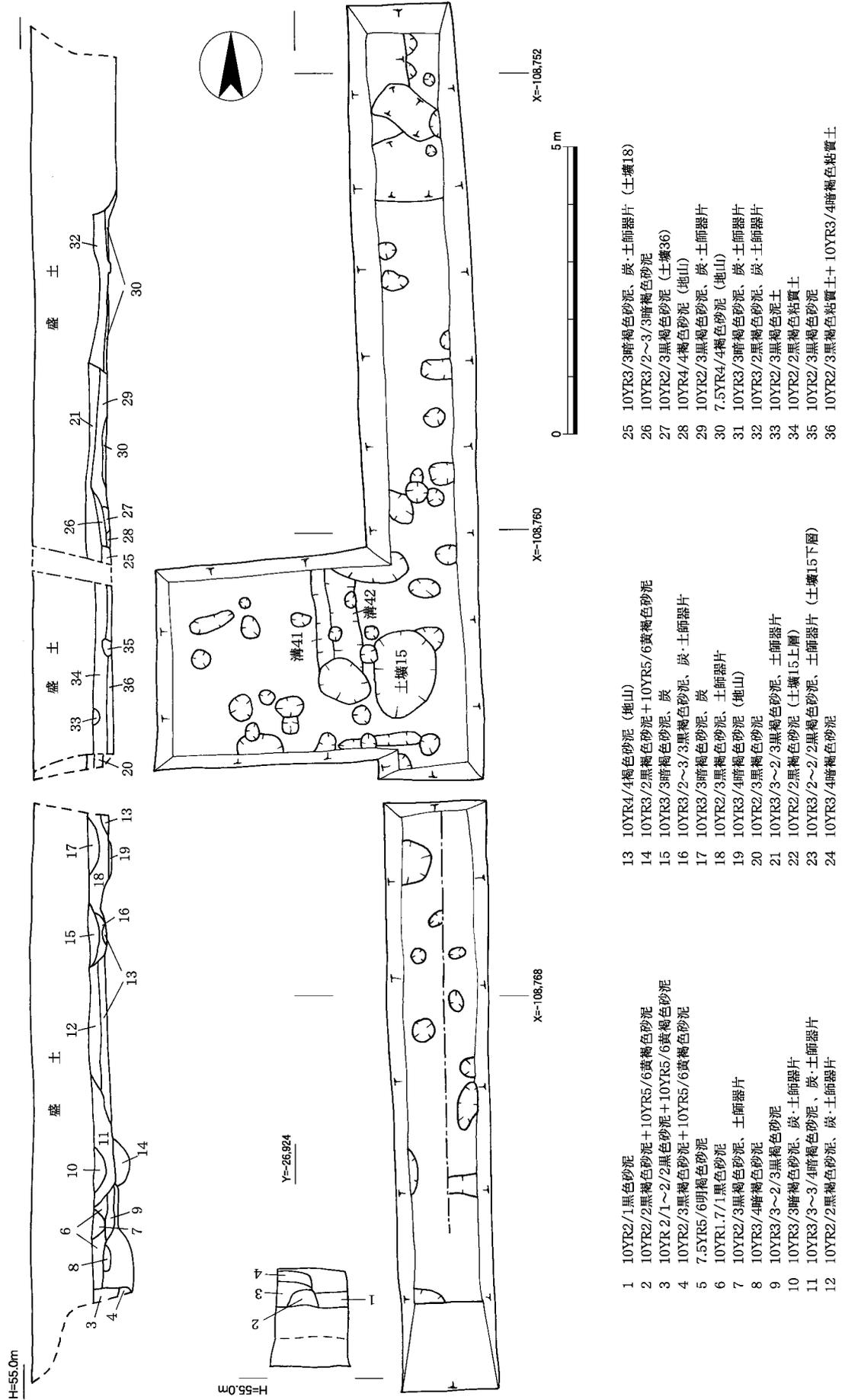
体育館南側の休閒地の調査である。ここは直前まで民間住宅であったため埋め立て造成をして



図3 試掘調査前全景（南東から）

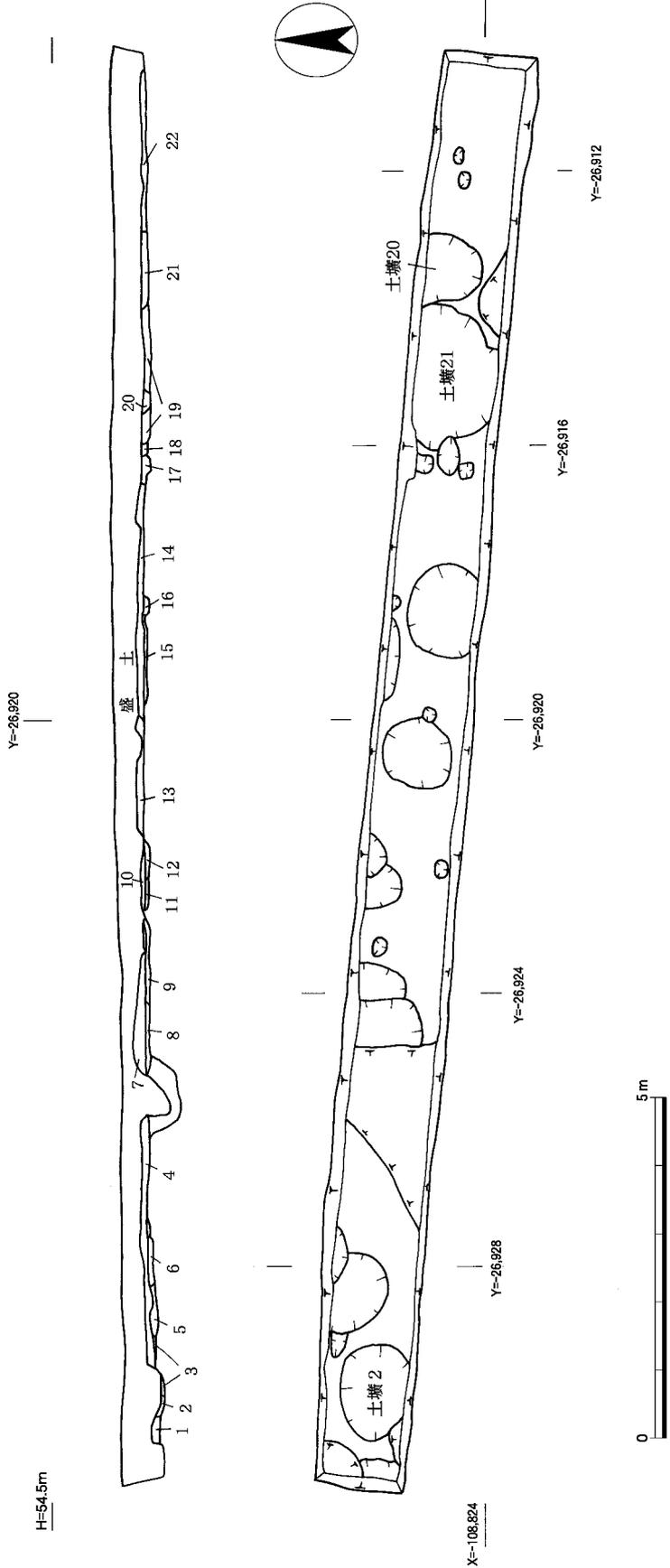


図4 土壇15（東から）



- | | | | | | |
|----|--------------------------------|----|--------------------------------|----|-------------------------------|
| 1 | 10YR2/1黒色砂泥 | 13 | 10YR4/4褐色砂泥 (地山) | 25 | 10YR3/3暗褐色砂泥、炭・土師器片 (土壇18) |
| 2 | 10YR2/2黒褐色砂泥 + 10YR5/6黄褐色砂泥 | 14 | 10YR3/2黒褐色砂泥 + 10YR5/6黄褐色砂泥 | 26 | 10YR3/2~3/3暗褐色砂泥 |
| 3 | 10YR2/1~2/2黒色砂泥 + 10YR5/6黄褐色砂泥 | 15 | 10YR3/3暗褐色砂泥、炭 | 27 | 10YR2/3黒褐色砂泥 (土壇36) |
| 4 | 10YR2/3黒褐色砂泥 + 10YR5/6黄褐色砂泥 | 16 | 10YR3/2~3/3黒褐色砂泥、炭・土師器片 | 28 | 10YR4/4褐色砂泥 (地山) |
| 5 | 7.5YR5/6明褐色砂泥 | 17 | 10YR2/3暗褐色砂泥、炭 | 29 | 10YR2/3黒褐色砂泥、炭・土師器片 |
| 6 | 10YR1.7/1黒色砂泥 | 18 | 10YR2/3暗褐色砂泥、土師器片 | 30 | 7.5YR4/4褐色砂泥 (地山) |
| 7 | 10YR2/3黒褐色砂泥、土師器片 | 19 | 10YR3/4暗褐色砂泥 (地山) | 31 | 10YR3/3暗褐色砂泥、炭・土師器片 |
| 8 | 10YR3/4暗褐色砂泥 | 20 | 10YR2/3黒褐色砂泥 | 32 | 10YR3/2黒褐色砂泥、炭・土師器片 |
| 9 | 10YR3/3~2/3黒褐色砂泥 | 21 | 10YR3/3~2/3黒褐色砂泥、土師器片 | 33 | 10YR2/2黒褐色砂泥、土 |
| 10 | 10YR3/3暗褐色砂泥、炭・土師器片 | 22 | 10YR2/2黒褐色砂泥 (土壇15上層) | 34 | 10YR2/2黒褐色粘質土 |
| 11 | 10YR3/3~3/4暗褐色砂泥、炭・土師器片 | 23 | 10YR3/2~2/2黒褐色砂泥、土師器片 (土壇15下層) | 35 | 10YR2/2黒褐色砂泥 |
| 12 | 10YR2/2黒褐色砂泥、炭・土師器片 | 24 | 10YR3/4暗褐色砂泥 | 36 | 10YR2/3黒褐色粘質土 + 10YR3/4暗褐色粘質土 |

図5 試掘1トレンチ実測図(1:100)



- 1 2.5Y3/2黒褐色砂泥、炭・土師器片・瓦器片
- 2 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥
- 3 10Y5/6黄褐色砂泥 (地山)
- 4 10YR3/1黒褐色砂泥、炭・土師器片
- 5 10YR3/3暗褐色砂泥、炭・土師器片 (土層 3)
- 6 10YR4/2灰黄褐色砂泥、炭・土師器片 (土層 5)
- 7 10YR3/2黒褐色砂泥、炭
- 8 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥、炭・土師器片 (土層 6)
- 9 10YR4/2灰黄褐色砂泥、炭・土師器片 (土層 7)
- 10 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥、炭・土師器片 (土層 10)
- 11 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥、炭・土師器片 (土層 9)
- 12 10YR3/3暗褐色砂泥、炭
- 13 2.5R5/2暗灰黄色砂泥、炭・土師器片
- 14 10YR4/2灰黄褐色砂泥、炭
- 15 10YR2/3黒褐色砂泥、炭・土師器片 (土層 14)
- 16 10YR3/2黒褐色砂泥、炭・土師器片 (柱穴 15)
- 17 10YR3/2黒褐色砂泥、炭・土師器片 (柱穴 11)
- 18 10YR4/6褐色砂泥 + 10YR3/3暗褐色砂泥粗じり (地山)
- 19 10YR3/3暗褐色砂泥、炭・土師器片 (土層 21)
- 20 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥、炭 (柱穴?)
- 21 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥、炭・土師器片 (土層 20)
- 22 10YR4/4~4/6褐色砂泥 (地山)

図 6 試掘 2 トレンチ実測図 (1 : 100)

いないので、遺構面までは0.3m前後で達した。その直上までは近現代の土層であった。遺構は1トレンチと同様、地山を切り込む形で検出された。

表1 試掘調査遺構概要表

時 期	遺 構	
	1トレンチ	2トレンチ
鎌倉時代	土壙15、溝41・42	土壙2・20・21

土壙20 調査区の東端に近いところで検出した。直径1.0mの円形に近い土壙で、井戸の可能性があると考えた。遺物は灰釉陶器の鉢の破片が出土している。

土壙21 土壙20の西隣で検出した。東西2.0m、南北1.0m以上ある不定形な土壙で、性格は不明である。平安時代の須恵器壺の破片が出土している。

土壙2 東西1.2m、南北1.0m以上ある土壙である。井戸の可能性があると考えた。遺物は須恵器の甕の破片が出土している。

(3) 遺 物

出土した遺物は、いずれも細片であり、図化するにはいたらなかった。

1トレンチ

平安時代後期から鎌倉時代前期に相当する遺物が、土壙15に集中してみられた。ただし、絶対数も少なく、小片であり、口縁部が残るものはごく一部である。

2トレンチ

平安時代の遺物と想定されるものが何点か出土している。土壙2からは須恵器甕の破片がある。体部の一部であるが、詳細は不明である。土壙20からは灰釉陶器の鉢底部が出土している。高台はバチ形をしている。土壙21からは須恵器壺の破片が出土した。体部の小片である。

(4) 小 結

1トレンチについては、土壙15および溝41・42以外にも、直径0.2m前後であるが柱穴を18基検出しており、小規模な建物や関連した施設が存在しているものと想定できる。

2トレンチについては、井戸状の土壙および直径0.5mほどの柱穴らしき遺構も検出しており、平安時代遺構の存在が想定された。

表2 試掘調査遺物概要表

時 代	内 容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
鎌倉時代	土師器・瓦質土器	1箱		1箱	0箱
室町時代	土師器・瓦質土器	1箱		1箱	0箱
近 世	土師器・施釉陶器・染付	0箱		0箱	0箱
計		2箱		2箱	0箱

4 . 1 次調査

(1) 経 過

試掘調査の結果、井戸状土壌や柱跡などを2トレンチを中心に多数検出した。このことから、京都市埋蔵文化財調査センターの指導により、1トレンチについては土壌15とその周辺の遺構を解明する目的で部分拡張を行い、2トレンチの位置する休閒地は発掘調査となった。調査の期間は9月4日から10月5日に設定された。

既に述べたように、調査地付近は古墳時代の墳墓や集落跡があり、また平安時代には嵯峨天皇の皇子である源常の山荘なる別業の存在が想定されている。また、調査地周辺のこれまでの立会調査などでも平安時代の土壌や溝が検出されており、『京都市遺跡地図台帳』に「草木町遺跡」として登録されている。したがって、主として今般の調査では平安時代の遺構の検出を主眼においた調査となった。

9月4日から資材搬入やプレハブ設置などを行い、9月5日から重機掘削を始めた。遺構検出や記録作成などの作業を行い、10月5日に機材の撤収を行い、現場での全ての作業を終了した。

調査の結果、検出した遺構の年代は鎌倉時代前期と室町時代の二時期に分けられる。調査地で検出された東西の溝は集落や耕地を区分する南北の区画をなしているものと考えられる。柱穴は東西方向に並ぶものはいくつかあるが、建物として確認できたものは1棟である。

(2) 遺 構

検出した遺構は総数139ある。溝は4条で、土壌は33基、柱穴は78基ある。そのうち建物は1棟、柱列は3列、柵と想定できるものは2列ある。

遺構は、鎌倉時代前期と室町時代中期の二時期に分けられる。近世の遺構は溝35や溝82などがあるが、多くは中世遺構面直上までの攪乱のため削平されており、残りのものは攪乱と区分のできる明確な遺構を抽出することはできなかつたので、遺構面としてはとりあげなかつた。

鎌倉時代前期のものには、東西に走る溝が2条と、その南に柱列1・2および建物などがある。



図7 1次調査前全景(東から)

また、これらより若干時期は古くなるが性格不明の土壌がある。

室町時代中期のものには、東西の溝と、それに沿った形で2列の柵列、そしてその北側に点在する土壌などがある。以下、各々の時期ごとに概要を報告する。

鎌倉時代の遺構(第2面)

溝44・139 この時期、調査地の北端に近い部分で東西の溝が走る。溝は2条ある。北側の

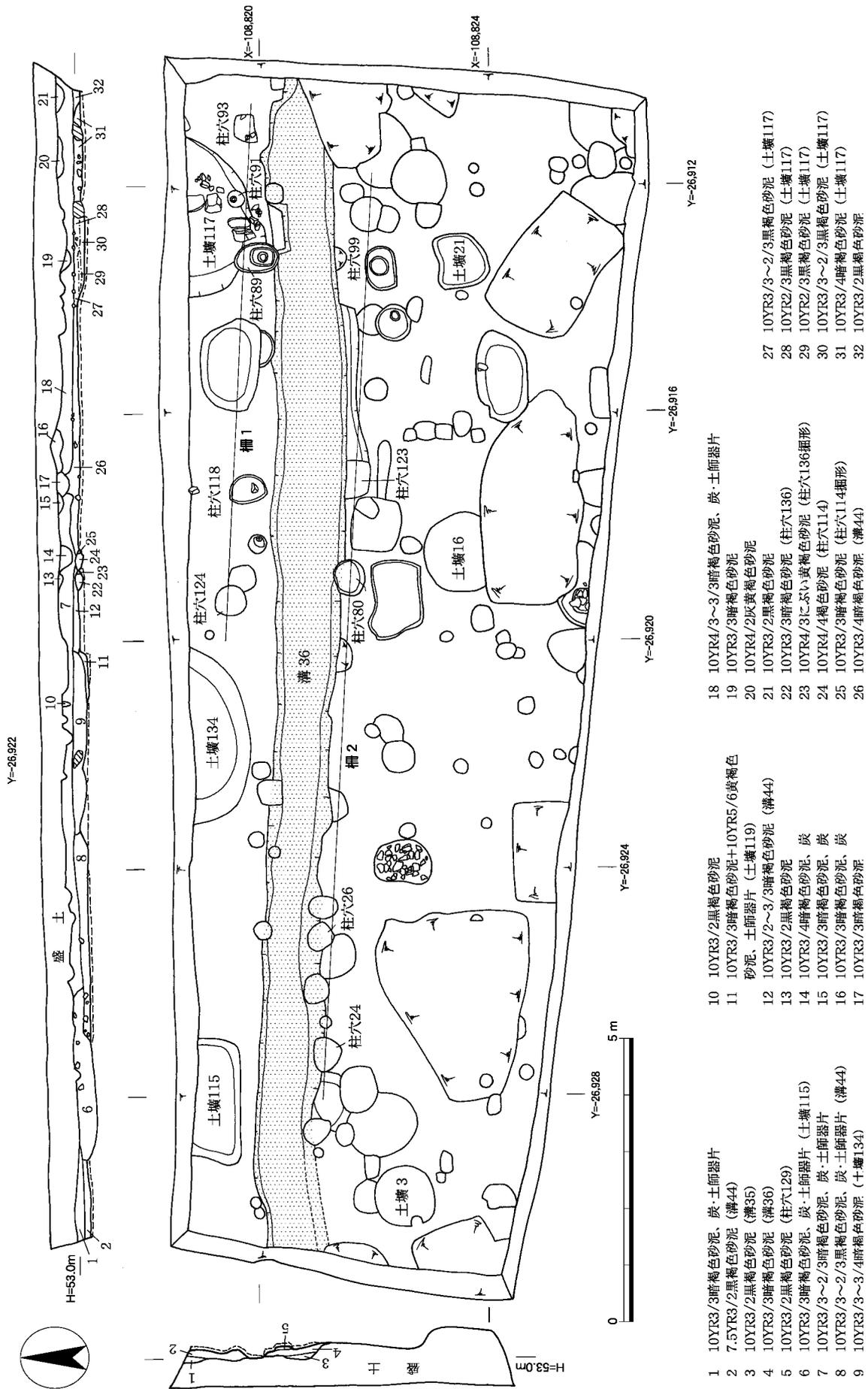


図 8 1次調査第1面実測図(1:100)

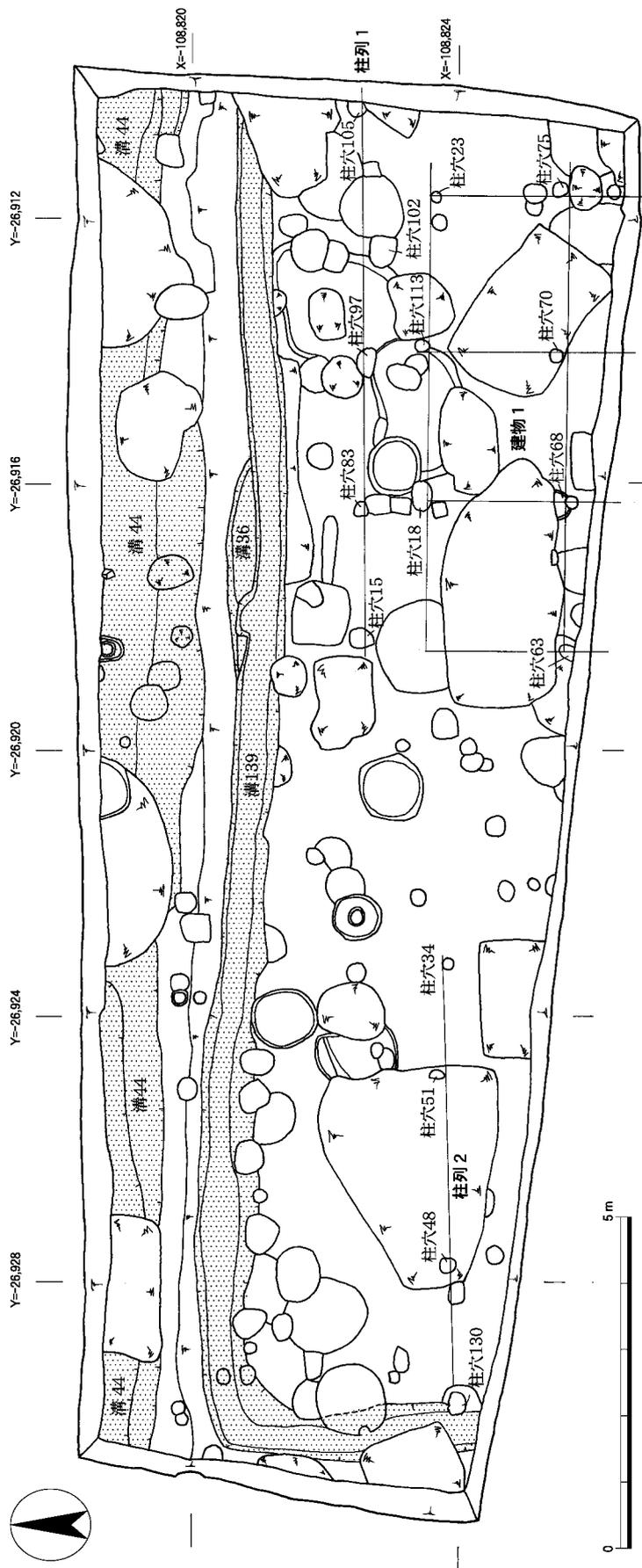


図9 1次調査第2面平面図(1:100)

ものは溝44で幅1.0m以上あり、深さ0.15mを測るが、さらに北に傾斜しており、溝の北側肩部は調査地外の北側に続く。この溝は、耕作に伴う可能性もあるが、東西に走り調査地を横切る。

一方、南側の溝139は、西の端において南に折れ曲がっている。この溝は幅は0.8m、深さ0.3mを測る。

柱列1・2と建物1 遺物が出土していないので、時期決定にあたり即断はできない。しかし、室町時代中期には溝36より北側に規模の大きい土壌115・117・134などがあり、この時代には溝の北側に主要な遺構が想定された。したがって、検出された柱列や建物は、それより古い時代のものと想定したい。柱列1は、柱穴15・83・97・102・105で構成される。柱列2は、柱穴130・48・51・34で構成される。柱列1および2は柱間が2.1mである。建物としては構成できなかった。建物1は、東西3間以上、南北1間以上で、柱穴18・113・23および柱穴63・68・70・75で構成されている。柱間は2.1mである。

室町時代の遺構(第1面)

溝36 東西方向は溝139を踏襲した状態で走り、西端において南流せずに直進する。深さは0.1mで、幅は1.2mである。

柵 1・2 溝36の南北両肩部に近いところで、それに平行して東西の柵が設置されている。柵 1は、柱穴124・118・89・93で構成される。柵 2は、柱穴24・26・80・123・99で構成される。各々の柱間は2.1mである。

土壙115 調査地北西部、溝36の北側で検出した。溝44を切っている。東西2.0m、南北0.8m以上を測る。土壙内には人頭大の石が集中していた。性格は不明である。

土壙134 調査地北側中央部、溝36の北側で検出した。溝44を切っている。東西3.0m、南北1.0m以上のものである。遺物には土師器の他、常滑などの焼締陶器の甕や東播系の捏鉢や龍泉窯系青磁などが少量ながらある。

土壙117 調査地北東部で検出した。溝44を切っている。規模は東西3.6m、南北1.2m以上を測る。長径0.4m前後の石が数個散在している。遺物は14世紀中葉から15世紀代前半の土師器皿や龍泉系青磁や瓦質土器が出土している。

土壙 3・16 性格は不明であり、遺物がないので正確な時期も断定しがたいが円形の土壙である。ただし、建物 1よりは確実に新しい。底は湧水層まで掘られていないので井戸ではない。壁面を観察してみると、一定期間水が溜まっていたと思われ、袋状にえぐれており、地山の砂礫層が露出している。

(3) 遺物

遺物で接合して完形になるものは須恵質の小型椀のみで、他は小破片がほとんどである。

鎌倉時代の遺物

出土した遺物は全般的に少ない。土師器の他、溝44からは須恵質小型椀、常滑甕などの焼締陶器、瓦などの破片が出土している。また溝139からは瓦器羽釜が出土している。その他に灰釉陶器鉢(土壙21)などがある。

図10の1～3は溝44から出土した遺物である。1は口縁外側の一部と内面に自然釉がかかった須恵質の小椀である。体部外面の中位から内面全体にナデを施し、底部は糸切りを行っている。2は橙色の小振りの土師器皿で、体部はわずかに内湾する。口縁端部には煤の付着がみられる。3は白色系の土師器皿である。体部下方の立ち上がり部分は丸みを帯び、口縁部は外面に若干肥厚し、端部に向けて内湾して丸く収まる。13世紀中葉前後におさまる遺物群である。

室町時代の遺物

出土した遺物は、土師器のほか瓦器鍋、須恵器壺、東播系捏鉢、青磁、平瓦(溝36)などがある。

表3 1次調査遺構概要表

時期	遺構
鎌倉時代	溝44・139、柱列1・2、建物1
室町時代	溝36、柵1・2、土壙3・16・115・117・134

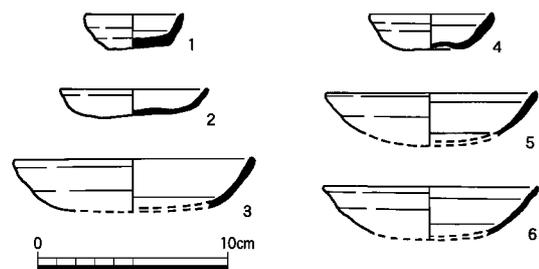


図10 1次調査出土遺物実測図(1:4)

表4 1次調査遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
鎌倉時代	土師器・須恵器・瓦質土器・焼締陶器	5箱	土師器2点、須恵器1点	1箱	0箱
室町時代	土師器・瓦質土器・瀬戸灰釉・青磁・瓦		土師器3点	3箱	0箱
近世	土師器・施釉陶器・染付	1箱		0箱	1箱
計		6箱	6点(1箱)	4箱	1箱

また、土壌117からは東播系捏鉢、備前・丹波播鉢、常滑甕、瀬戸灰釉陶器鉢、青白磁の破片がある。土壌134からは、土師器のほか常滑甕、東播系捏鉢、瓦質土器鍋、龍泉窯系青磁などが出土している。その他の遺構からの出土遺物は小片が多く、遺物内容は前述したものに近い。

図10の4～6は土壌117から出土した土師器である。4は灰白色の小振りの皿である。底部中央はやや持ち上がり、体部が肉厚となり口縁部は体部外面から内湾して収める。5と6は、口縁が肥厚するものと、ほぼ同じ厚さを保つものとの違いはあるが、ともに灰白色の色調で底部から緩やかに立ち上がり、体部上位でわずかに外反し、端部は上方向につまみあげている。14世紀前半から15世紀代までにはおさめられよう。

(4) 小 結

検出した溝は近世まで東西方向については踏襲しているので、集落や土地の区画と考えられる。

特に鎌倉時代前期の段階では、南側の溝139が西端において南流しているので、その北側で東西に延びる溝44は北側に隣接するであろう別の区画との境界的な溝であり、溝139は溝の南側に展開する集落などの内側の区画と考えられる。

室町時代前半には南行する溝はなくなり、西端においても溝は東西方向に続いている。これは、集落の規模が拡大したことを意味するのか、それともこの溝がより幅広く深い構造になっていることから防御的な性格を持つ溝とした可能性もあるが、検討を要する。

また、近世(溝35)においても若干北東方向にずれるものの、溝は踏襲されている。したがって、土地の区画という意味では、近世まで大幅な変動はなかったといえよう。この資料は都市近郊の村落の有り様を解明するものとなろう。

5 . 2 次調査

(1) 経 過

1次調査地の北に隣接する体育館は南半部分が新設の体育館部分にあたるため、1次調査の結果から遺構の存在が想定されたので、2次発掘調査となった。調査は2月6日より重機掘削を開始し、遺構検出、写真、図面作成などを行い、3月20日に終了した。調査地は、試掘1トレンチの時と同様に体育館建築時に造成して盛り土してあり、1.5m前後攪乱土層として除去した。調査地は体育館の中での作業となり、重機掘削に4日も費やすことになった。また、屋内撮影となったので写真記録にも手間取るなどした。

調査の結果、室町時代から近世にかけての中世の溝2条を側溝とする南北にはしる農道と思われる遺構を検出した。鎌倉時代前期と想定される建物や土壌を検出した。

(2) 遺 構

遺構総数は203ある。溝は2条、土壌は9基で、それ以外は柱穴である。その内、復元できる建物は1棟である。

鎌倉時代前期に想定される遺構は、建物1棟と土壌35である。また、室町時代から近世にかけての遺構は、溝2条と土壌7基がある。

鎌倉時代の遺構（第2面）

建物1 東西2間以上、南北3間以上のものである。柱間は南北2.1m、東西2.0mである。北側の底部分の柱間は1.8mである。柱穴の規模は径0.3m前後であり、小規模なものである。柱穴112・128・147・140・90・137と底部分の柱穴118・131・151で構成される。

土壌35 東西1.2m、南北1.0mほどで、深さ0.3mの楕円形状の土壌である。遺物には硯、東播系の捏鉢などがあるが、性格は不明である。

室町時代から近世の遺構（第1面）

溝31・60 調査地の中央よりやや西寄りの地点で、南北方向の溝が1.6m前後の幅をおいて2条



図11 2次調査前全景（北東から）

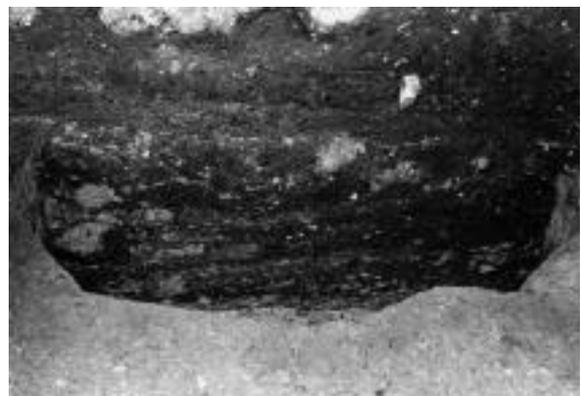
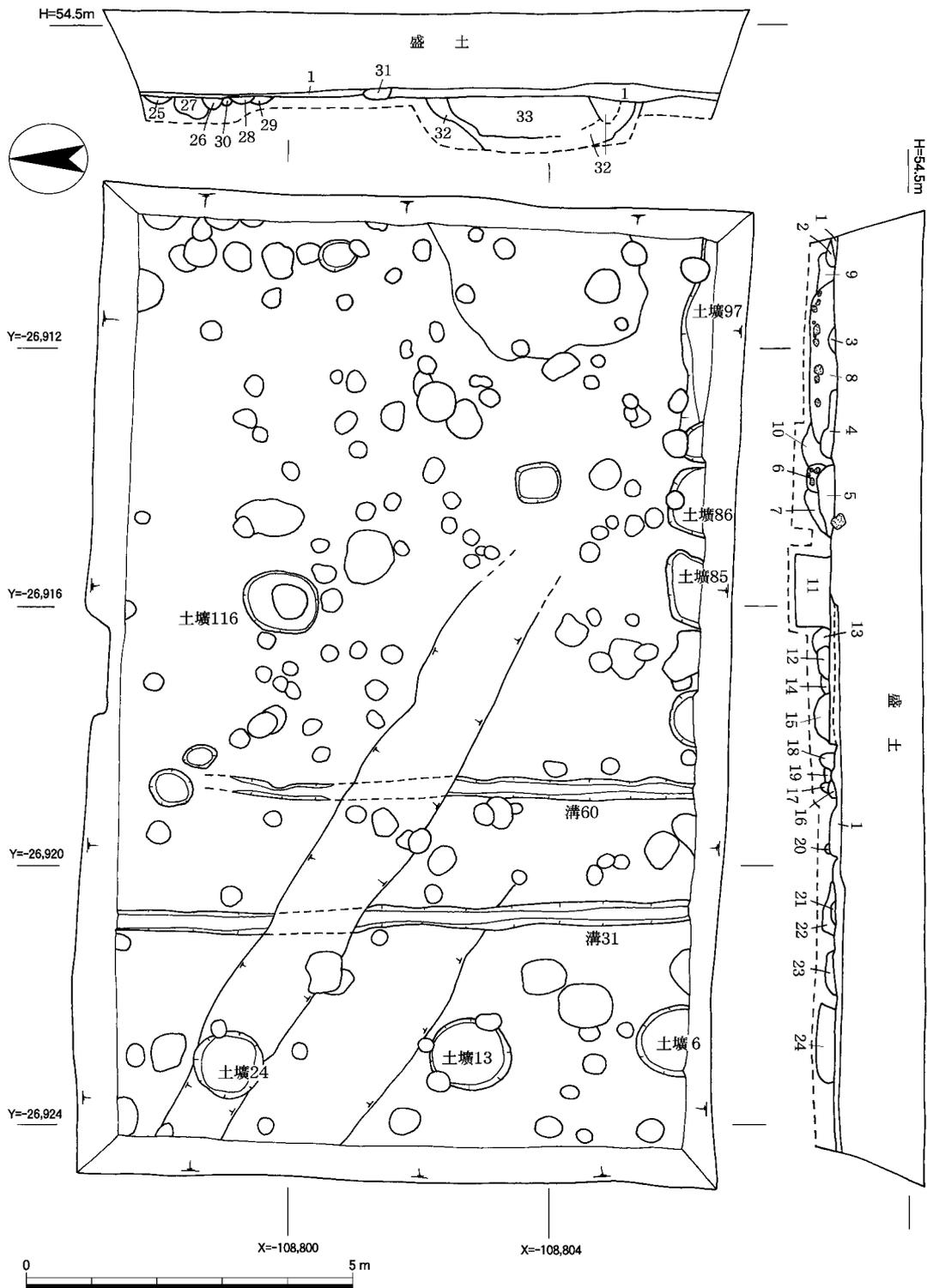


図12 土壌6（北から）



- | | | |
|-----------------------------|----------------------------|------------------------|
| 1 10YR3/2黒褐色砂泥 | 13 7.5YR3/2黒褐色砂泥 | 24 7.5YR2/3極暗赤褐色砂泥 |
| 2 10YR2/3黒褐色砂泥 | +10YR4/6褐色粘質土 | +7.5YR5/4にぶい褐色粘質土(土壙6) |
| 3 10YR3/2黒褐色砂泥 | 14 5YR2/3極暗赤褐色砂泥 | 25 7.5YR2/3極暗赤褐色砂泥 |
| 4 10YR3/2黒褐色砂泥 | 15 7.5YR2/3極暗赤褐色砂泥(土壙63) | +7.5Y6/6橙色砂泥 |
| 5 10YR3/2黒褐色砂泥、土師器片(土壙86) | 16 10YR3/3暗褐色砂泥(溝60) | 26 7.5YR4/4褐色砂泥 |
| 6 10YR3/3暗褐色砂泥礫混(土壙86) | 17 10YR2/2黒褐色砂泥 | +7.5YR4/3褐色砂泥 |
| 7 10YR3/3暗褐色砂泥(土壙86) | 18 10YR2/3黒褐色砂泥 | 27 7.5YR3/4暗褐色砂泥 |
| 8 10YR2/3黒褐色砂泥、炭・土師器片(土壙97) | 19 7.5YR3/2黒褐色砂泥 | 28 7.5YR2/2黒褐色砂泥 |
| 9 10YR2/3黒褐色砂泥 | +10YR4/6褐色砂泥(柱穴61) | 29 7.5YR2/3極暗赤褐色砂泥 |
| +10YR4/6褐色粘質土 | 20 7.5YR2/3極暗赤褐色砂泥(柱穴40) | 30 7.5YR2/3極暗赤褐色砂泥 |
| 10 10YR3/3暗褐色砂泥、土師器片 | 21 10YR3/3暗褐色砂泥(溝31) | +7.5YR4/6褐色砂泥 |
| 11 7.5YR2/2~5YR2/2黒褐色砂泥~泥土 | 22 10YR3/3暗褐色砂泥 | 31 7.5YR3/1黒褐色砂泥 |
| (土壙85) | +7.5YR5/6明褐色粘質土(柱穴195) | 32 7.5YR2/2黒褐色粘質土(植物根) |
| 12 7.5YR2/2黒褐色砂泥(土壙64) | 23 7.5YR3/2~3/4黒褐色砂泥(柱穴11) | 33 7.5YR4/6明褐色粘質土(植物根) |

図13 2次調査第1面実測図(1:100)

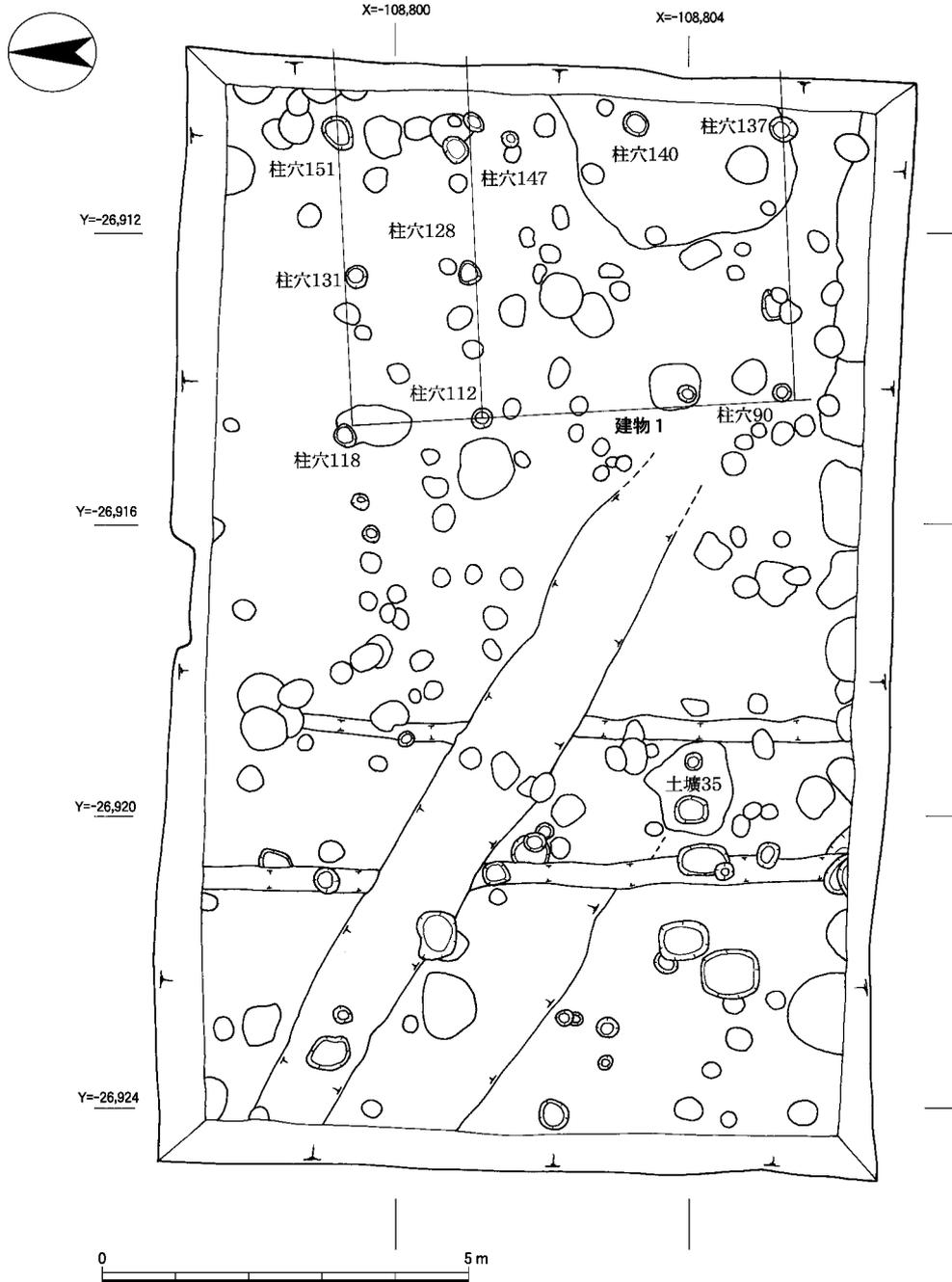


図14 2次調査第2面平面図(1:100)

検出された。調査地の学校ができる以前の景観は農耕地となっており、この時期においても簡素な建物の他は耕作地であったと思われる。2つの溝を挟んだ平坦地は農道で、溝はおそらくその側溝と思われる。

土壌 6・13・24・116・85 これらの土壌は溝31・60の左右にあり、南北に並んでるような配置をしている。規模は、直径1.0m前後のもので、深さは0.5mまでのものである。断面観察によれば井戸や柱穴の痕跡はなく、埋没状態は時期差が認められず、一時に埋没したものと考えられる。遺物はごく少ないが、15世紀後半以降の遺構と思われる。遺構の性格として、農耕に使用するいわゆる野壺(肥溜)の可能性も想定した。

表5 2次調査遺構概要表

時 期	遺 構
鎌倉時代	建物1、土壇35
室町時代	溝31・60、土壇6・13・24・85・86・97・116

土壇86・97 土壇86は東西1.0m、南北0.1m以上のものである。底には拳大の石が散在している。深さ0.1mを測り、搦鉢状をしているが、性格は不明である。土壇97は東西3.0m以上、南北は0.5m以上あり、南に傾斜しており、0.4mで底はまだ検出していない。斜面には人

頭大の石が詰まっており、遺物は滑石の羽釜や火鉢などが出土した。出土した遺物から15世紀中葉までの遺構となろう。性格は不明である。

(3) 遺 物

遺物は小片のみであり、完形のものはない。

鎌倉時代の遺物

平安時代のものでは緑釉陶器の小破片、須恵器甕片があるがごく少ない。土師器は少ないながらも鎌倉時代前期に相当するものが散在している。その他には、東播系の捏鉢や硯などがある。

土壇35からは土師器皿、須恵器、東播系捏鉢、瓦器鍋などが出土した(図15-7~10)。7と8は土師器の小皿である。内湾して体部から口縁を横ナデしている。7は口縁の摩滅もあるが同時期のものであろう。13世紀中葉に位置するようだ。9は須恵器の口頸部である。口縁端部は外方に肥厚する。平安時代のもので混入品である。10は、東播系の須恵器の捏鉢である。前段階のものより口縁部の外反が弱くなり小型化し、口縁端部の拡張が上下に認められるものである。13世紀前・中葉におさまるとみられる。

また、硯(図17-17)も土壇35より出土した。高さ2.1cm、縦12.1cm、横上面7.4cm、横下面6.5cmを測る。使用痕は顕著ではない。海部上端が欠損している。下面中央部に凹部があり、転用されている。両側面とも外側に広がっている。

軒平瓦(図16-16)は、遺構検出中のものである。小型のもので、瓦当面はいわゆる完全折り曲げで形成されている。同文のものは鳥羽離宮跡や法金剛院旧境内で出土している。平安時代末期前後のものであり、栗栖野産と見られる。

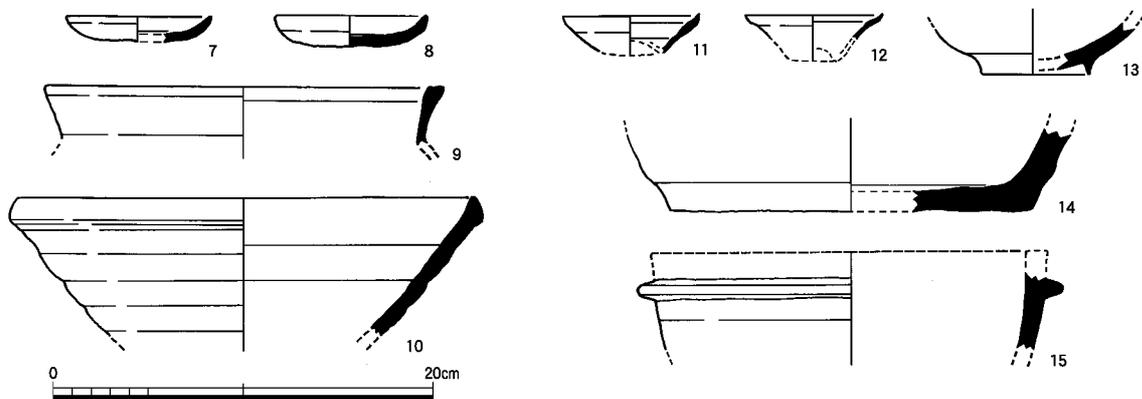


図15 2次調査出土遺物実測図(1:4)

室町時代の遺物

土師器は小片ながら少なからぬ遺構から出土している。

まとまった遺構からの遺物としては、土師器・瓦質土器・青磁・信楽播鉢・滑石製羽釜などが土壙97から出土している（図15 - 11～15）。11と12は白色系のいわゆるへそ皿タイプと思われる土師器である。体部は外反して口縁端部で立ち上がっている。15世紀代の中葉までにおさまる。13は龍泉窯系青磁椀である。緑灰色の釉色を全面に施してある。高台畳付は釉を剥がして露胎にしている。釉は厚く施されている。13世紀中頃から14世紀初頭の時期である。14は浅い瓦質土器鉢の底部である。体部は緩やかに内湾する。口縁端部は欠損しているが丸みをもち収まるタイプと思われる。脚部の有無は不明である。14世紀中葉以降にみられる。15は滑石製の羽釜である。口縁部直下に削り出された鍔がめぐるもので、底径が口縁部の径よりも小さいものである。平安時代後期から鎌倉時代にかけてのものであろう。

したがって、土壙97の遺物は、15世紀代中葉までの遺物群に13世紀前後の遺物が混入していることになる。

(4) 小 結

遺構は大きく分けて二時期あり、室町時代を中心とするものと鎌倉時代前期のものがある。

1次調査で検出した東西の溝に関連するものは検出できなかった。前回検出の東西溝を境にした形で、それより北の部分の土地利用の一端が垣間見えてきた。一定の区画内では、何度も建て替えを繰り返した簡素な建物の存在が何棟か窺え、周辺に耕作地を伴っていたと思われる。

室町時代より近世にかけても基本的には同様の土地利用を行っていたようである。近辺の更なる調査が期待される。

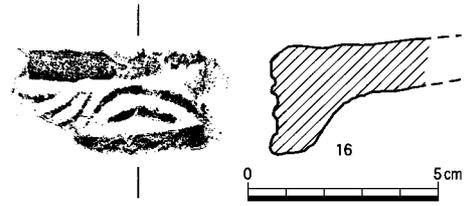


図16 軒平瓦拓影・実測図(1:2)

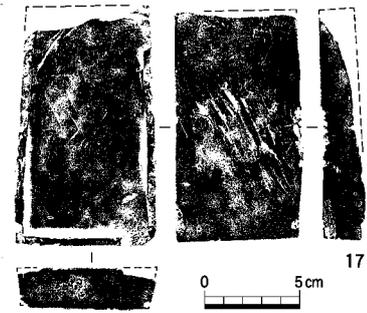


図17 土壙35出土硯拓影(1:4)

表6 2次調査遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
鎌倉時代	土師器・須恵器・瓦質土器・石製硯	4箱	土師器2点、須恵器2点、軒平瓦1点、石製硯1点	1箱	0箱
室町時代	土師器・瓦質土器・焼締陶器・青磁・滑石製品		土師器2点、瓦質土器1点、青磁1点、滑石羽釜1点	2箱	0箱
近世	施釉陶器・染付・人形	1箱		0箱	1箱
計		5箱	11点(1箱)	3箱	1箱

6.まとめ

調査地にかぎっていえば、土地利用が顕著になるのは鎌倉時代以降のようである。

平安時代の遺物は須恵器や緑釉陶器などが散在しているものの、平安時代の土地利用は、近隣に点在していたであろう、特定の別業等のほかは農耕などに限られていたようである。

鎌倉時代になると飛躍的に柱穴が多くなり遺物も前代に比べると増え、溝を伴っている。これは、この時代の集落の特徴の現れと見なせよう。「中世の集落は一般的には掘立柱建物で構成される。(中略)13世紀からさらに集落数は増加する。周囲を溝で区画した屋敷地が全国でみられるようになる。⁴⁾」というような情景の一端であろう。

室町時代にもこの地で集落が踏襲されていたことになる。規模や性格がどのようなものかについては不明である。集落境を形成すると考えられる東西の溝には柵と思われる柱列が少なくとも2条あることから、多少防御的な性格も付加させてきたとも考えられる。

また、室町時代には小規模な建物とともに、農耕用と思われる通路の脇には、いわゆる野壺に相当する土壌が検出された。しかし、土壌分析を依頼した環境考古研究会(代表 金原正子)によって、否定的見解⁵⁾が出されているので、ここでは遺構の性格付けについては保留としておきたい。

註

- 1) 『京都嵯峨野の遺跡 - 広域立会調査による遺跡調査報告 - 』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1997年
- 2) 草木町遺跡について、『京都嵯峨野の遺跡』では、以下の調査結果が報告されている。
「遺構・遺物が分布する範囲は、常盤野小学校東側、常盤草木町を中心にして半径200mに及ぶ。立地条件や遺構の時期から、山荘跡と推定される。『続日本後紀』承和14年条に記される左大臣源常の山荘である可能性を指摘できる。また、この遺構群の北東地域でも、平安時代前期にさかのぼる遺構群の検出があり、同様な山荘跡の可能性がある。」
- 3) 『続日本後紀』承和14年(847)10月20日条に仁明天皇の「天皇遊獵之時」において「左大臣源朝臣常山庄在丘南。」なる記述がある。これは、双ヶ岡の「四望地」としているから「一の丘」から天皇が見た南の方をさすことになる。現在の「常盤」も広い意味で南の方向になろう。
- 4) 編集代表 小野正敏 『図解・日本の中世遺跡』 東京大学出版 2001年 の「村と町」に変遷と形態の概略が示されている。
- 5) 「分析の結果、各試料とも寄生虫卵および明らかな消化残渣は検出されなかった。同時に行った花粉密度も非常に低かったことから、有機物の分解される乾燥あるいは乾湿を繰り返す堆積環境であったと考えられるが、ここでは、寄生虫卵が当初より含まれてなかったのか、「野つぼ」の腐熟による分解によって失われたのか判断できない。したがって、これらの土壌が「野つぼ」であるかどうか言及できない。」

圖 版

報 告 書 抄 録

ふりがな	くさきちょういせき							
書 名	草木町遺跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報							
シリーズ番号	2001-13							
編 著 者 名	津々池惣一							
編 集 機 関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所 在 地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発 行 所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2003年2月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
くさきちょういせき 草木町遺跡	きょうとしうきょうく 京都市右京区 うづまさきょうのみちちょう 太秦京ノ道町	26100	768	35度 01分 77秒	135度 42分 30秒	試掘調査 2001年7月 27日～2001 年8月22日	237㎡	プール及 び体育館 建て替え
						1次調査 2001年9月 4日～2001 年10月5日	157㎡	
						2次調査 2002年2月 5日～2002 年3月20日	160㎡	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
草木町遺跡	集落跡	鎌倉時代	建物・溝・土壇	土師器・須恵器・瓦質 土器・瓦		平安京近郊におけ る土地区画に関連 する遺跡など		
		室町時代	溝・柵列・土壇	土師器・須恵器・焼締 陶器・石製品				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2001-13

草木町遺跡

発行日 2003年2月28日

編集発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 075-256-0961